

帰って来た_対人援助学の縦横無尽 (4)

2025 年度後半期のふりかえり

立命館大学総合心理学部 サトウタツヤ
学校法人立命館理事・副総長／立命館大学副学長

前口上

コロナ禍以降の文化心理学ネットワークの再始動の様子を記録として『対人援助学マガジン』に寄稿するのはこれで4回目になる。今回は前回に続き、2025 年度秋学期の活動をまとめた。

まず、8 月下旬にはオールボー大学の Sarah Awad 先生を迎え、学内での講義に加えて、学生も同行して京都の名所を回った。9 月は福島に滞在し、復興に関する文化心理学研究会の場を持ちつつ、現地の人々とも時間を共有した。10 月から 11 月にかけては学会や学園祭など学内外の出来事が続き、12 月以降は卒論期の山場や、海外からのゲスト受け入れなどが続いた。

2025 年 12 月から 2026 年 2 月にかけて、海外から 3 人の研究者・学生を迎えた。歓迎会ではたこ焼きを自分たちで焼いてもらうのが恒例になっている。



1 人目はウィーンのジークムント・フロイト私立大学 (Sigmund Freud PrivatUniversität: <https://www.sfu.ac.at/de/>) から来た Dominik Stefan Mihalits である。Dominik は主に臨床心理学を専門とする助教で、日本には 2025 年の 11 月から 1 年間滞在する予定だ。

名前の日本語表記を考えたりもした。



2 人目はブラジルのカンピーナス・カトリック大学 (Pontifícia Universidade Católica de Campinas, PUC-Campinas: <https://www.puc-campinas.edu.br>) から来た Rebecca M. A. Ferreira Carvalho である。Rebecca はマンガと心理療法について研究している博士課程の学生で、滞在期間は 2026 年 1 月から 4 ヶ月の予定だ。

Rebecca のサイト ↓

<https://rebeccaferreiracarvalho.com.br>

Rebecca のインスタ ↓

<https://www.instagram.com/rebeccapsi/>

3 人目はデンマークのオールボー大学 (Aalborg University: <https://www.en.aau.dk>) から来た修士課程の学生の Anna Villholth である。Anna はインターンシップ学生として 2026 年 2 月から 3 ヶ月滞在する予定である。

1. 2025 年 8 月 Sarah 先生 in 立命館

デンマークのオールボー大学 (Aalborg University: <https://www.en.aau.dk>) から Sarah 先生が来訪し、4 日間の夏季集中講義を行ってくれた。また、学生たちも交え、京都でエクスカージョンを行った。竜安寺を拝観し、豆腐懐石料理を食べて、金閣寺に行った。



2. 2025 年 9 月 福島訪問

9 月 19 日から 21 日にかけて福島を訪問した。初日には「第 7 回 福島原発事故からの復興に関する文化心理学研究会」に参加した。

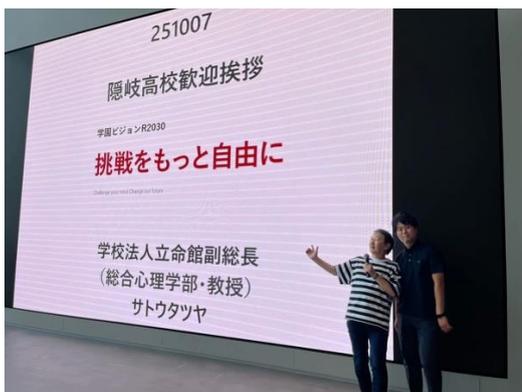


あわせて福島市では、10 年以上付き合いのある果樹園 (たかはし果樹園) を訪ねた。また浪江町では、2025 年 5 月に居酒屋 (さっちゃん) を始めた移住者さんと出会った。



3. 2025年10月 隠岐ジオパーク研究発表会 in 立命館

島根県立隠岐高校の生徒がOICに来て、ジオパーク研究発表会を行った。



4. the 7th Transnational Meeting on TEA

TEA 国際集会在 OIC にて行われた。オンラインで繋いだ Jaan Valsiner 教授によるナノ心理学についての講義が行われたほか、VR やメタバースを切り結ぶ質的探究といったワークショップを実施した。



5. 2025年11月 京都賞

京都にて開催された京都賞 晩餐会に出席した。前回出席した2016年の京都賞のときは、渡辺公三先生が副総長として出席していた。その役に自分が就いているわけで感慨深い。

受賞者としての Carol Gilligan にサインをもらった (実は推薦したと言ったら本人も喜んでいた)。Gilligan

はLawrence Kohlbergの道徳理論を男性的理論であると批判し、配慮（Care）と応答性（Responsibility）を加味した新しい道徳のあり方を提示した（サトウ、2021）。それが彼女の主著『もうひとつの声』である。



6. 2025年12月 卒論シーズン

卒論締め切りも間近となり、先輩たちから激励の差し入れが届いた。

今年は例年以上に卒論の発表が良かった。謝辞も面白かった。謝辞に感謝と謝罪が入っている人、自分に感謝する人、卒論の考えに詰まって泣き出したことを告白する人。卒論を泣くまで考えるってのはすごい。

ゼミ生たちの多くは研究者になるわけではないけど、正解が誰にもわからない問いを考えて苦しんで、その先に、何かつかめる、という経験をしてほしいと思っているので、泣くのもまた一興（本人は怒っていたが・・・）。



7. 2026年1月 2nd Transnational Meeting on Innovative Human Science (TraMIHS)

海外大学から教員や大学院生を招聘し、シンポジウムを行った。



8. 2026年2月 R-GIRO 記号創発ロボティクスに関するシンポジウム

今年度のR-GIROの成果報告会が行われた。DominikやRebeccaも発表した。



サトゼミ一期生の宮下太陽氏が（松葉杖も痛々しい姿で）講演を行った。



当日のプログラム↓

<https://www.ritsumei.ac.jp/rgiro/events/article/?id=265>

9. その他

色んな活動の一部（説明は省略）



引用文献

サトウ タツヤ (2021). 心理学の名著 30 筑摩書房